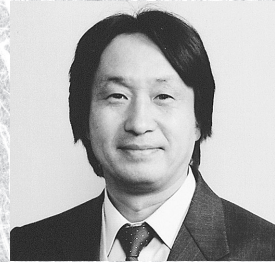


「ことばで生きる」力を育てる

——新刊『明解国語総合』のめざしたもの——

三浦和尚

(『明解国語総合』編集委員)



一、中・高の連続性

今日、義務教育段階の教育では、幼・小、あるいは小・中の一貫ないしは連携の必要性が叫ばれている。しかし、意外に課題として具体化していないのは、中学校から高等学校への連続性ではないか。

多くの地域で高等学校入学段階の学力差があるとすれば、中学とのつながり方は同じにはならない。A高校とB高校とは高校国語教育の出発点での具体的課題を共有しにくい。

そういう事態への対応として、高校教科書は、いくつかの種類が準備されてきた。到達点はともかく、出発点での生徒の実態にも配慮したものである。

しかし、いくつかの種類の中から教科書を選ぶに際して、現実には、おおむねどの高校においても、結果的にやや難しめの設定となる場合が多い。

こうしたさまざまな事情から、学校種・学年間の連続性という意味では、中学三年から高校一年の間のハードルがいちばん高いのはまちがいない、そこにこそ生徒の学習・発達の連続性という点で大きな課題があると言わざるを得ない。

二、「ことばで生きる」力

『明解国語総合』は、こうした問題意識に基づいて、高校国語教科書のバリエーションを広げようという試みであった。

私たちはこの教科書を必要とする学習者像を次のように想定した。

- ・ 中学での学びが必ずしも十分とは言えない。
- ・ 能力や関心の違いにより、多様な学びを必要とする。

そして何よりも、この教科書を用いて学ぶ生徒たちに、話題の追究や知識の獲得の過程で、「ことばで生きる」力をつけていきたいと願った。

ことばの機能については諸説あるが、伝達の機能のほかに、認識・思考の機能が大きな意味をもつことは明らかである。ことばで認識し、ことばで考え、ことばを用いて世界とかわり合っていく。国語科に求められている力は、そういう「ことばで生きる」力に他ならない。

三、『明解国語総合』の易しさと優しさ

結果として『明解国語総合』は、「易しい」教科書になった。少なくとも「易しく見える」教科書になった。

私は、例えば実力テストの問題は、同じ平均点であるならば、本文そのものが難しくてわかりにくい問題よりも、本文が易しめで、設問で考えさせる問題のほうが良質であると考えている。一読してわからない文章の内容を類推する力よりも、ある程度わかる文章の内容をさらに掘り下げて考える力のほうが、教育内容としてはまっとうだと思うからである。

このことを授業で言えば、生徒にとって取り付く島のない難しい文章について、その内容を教師が解説して終わる授業をよしとするのか、ある程度生徒に理解できる文章をもとに、発問等によってその内容の深さを発見していくような授業をよしとするのかの問題である。前者であれば、先生に内容を言い換えてもらっただけのことで、内容はわかるかもしれないが、読む力がつくわけでもなく、考えたり発見したりする喜びが生じるわけでもない。国語科の学習は、基本的には「ことばで考える力」の育成という視点を欠くわけにはいくまい。

大学の授業では、ご承知のとおり、例えば小学六年生の学習材「やまなし」(宮沢賢治)を文学としてまじめに取り上げている。六年生なりの理解や受け止め方

があり、大学生なりの理解や広がりがある。学びというものはそういう側面をもっているものであり、学習は「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」のが本物ではないか。わけのわからないものを突きつけて、「どうだ参ったか」というところから出発するものではない。

先に述べた「『易しく見える』教科書」というのは、「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」ことができる教科書という意味である。その過程で、ことばにこだわり、ことばで伝え合い、ことばで認識・思考する。そのことで「ことばで生きる」力の育成を図りたい。それが実現したとき、『明解国語総合』は、「易しい」けれど学習者におもねらず、学びの到達点を保障するという、学習者に対して「優しい」教科書となる。

四、『明解国語総合』の具体

……①全体の構成

『明解国語総合』は、原則として、1年4単位、または1・2年2単位ずつの履修を想定している。一人の教師が一つのクラスの国語の時間すべてを担当するという前提に立ち、現代文、古典、また「書く」「話す・聞く」という領域をそれ

ぞれにまとめるのではなく、教科書の初めから順番に学習するという構成となっている。中学の学習と同じような順序性があるので、学習の見通しを立てることができる。結果として、目次がモデルカリキュラムとなっているとも言える。

ただしそのことは、学習を固定的にするということではない。『明解国語総合』は本編と資料編の二部構成の形をとっており、資料編は「原稿用紙の使い方」などの便覧的ページと、「読書の森」による読書の広がりのためのページで構成されている。本編の学習の補完、補充、発展として資料編を用いることにより、学習者の実態に合わせた多様な学習を組織することが可能になっている。もちろん、特に文章学習材など、本編と資料編の学習材を入れ替えることで学習者に適応させることもできる。

……②学習展開への配慮

学習材は、「話す・聞く、書く、読む」また「言語事項」のいずれの領域・事項においても、中学校との連続性を強く意識した。また、学習に自信がなく、受身になりがちな学習者の存在を想定して、特に「話す・聞く」「書く」については、紙面も十分に取り、活動手順を丁寧に提

示して、なるべく具体的に活動しやすいように配慮した。「メモ取り伝言ゲーム」のように、実際に学習活動として成立する「話す・聞く」「書く」の学習材を目指すし、その充実を図っている。

「読むこと」の学習材においては、特に「教室で生徒たちが口を開く」ことを意識している。感想であれ意見であれ、生徒たちが教室で何か言いたくなるような状況、さまざまな考えを出し合ってみんなが深まっていく教室を願うためである。

そのために、学習材の内容そのものにインパクトを求めた。「水の東西」(山崎正和)、「羅生門」(芥川龍之介)といった定番の学習材は言うまでもなく、「希望」(大石芳野)、「緑のカイ」(岩瀬成子)、「緑——アフガニスタンのかかわり」(中村哲)など、感動であれ疑問であれ、何か言うべきことがあるといった学習材を採録することに努めた。

またひとつは、「学びの道しるべ(学習の手引き)」を工夫することによってその実現を図ろうとした。「学びの道しるべ」は、紙面を広く取り、場合によっては書き込むこともできるようにした。その課題は、その順序で考えていくことにより、読むことの学習そのものが展開

できるように配慮・工夫されている。

……③古典の学習について
古典の学習材は決して多くはない。それは、想定される学習者の実態にかんがみでのことである。

古典の学習については、特に中学との関連を重視した。入門は「古典の響き」とし、「枕草子」「奥の細道」など、中学校で学習したものを置いて、高校との橋渡しを図った。生徒は安心して高校の古典の学習のスタートを切るようになる。

また、古文では現代語訳、漢文では書き下し文を積極的に配置した。それは、少しでも早く古典の内容に入り、その古典世界のおもしろさを味わわせたいと考えたからである。古典文法や漢文訓読の方法に習熟しないと内容には入れないという学習観にはくみしていない。

そのため、古典文法と漢文訓読の方法は、本編の末尾にまとめて提示した。適宜必要に応じて参照することができるとともに、逆に、全体像を視野に入れたまとまった学習が可能になる。

ただ、そういう方針で編集しながらも、古典学習を後退させてよいと考えているわけではない。そのことは、「木曾の最期」「桃花源記」など、内容的な重みのある

学習材を積極的に配置したことで具現されていよう。古典学習にも、「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」という考え方は踏まえられている。

おわりに

『明解国語総合』は、既に中学校国語教科書として定評のある三省堂『現代の国語』を踏襲し、その学習を高校で受け継ぐ教科書として編集された。高校の先生方には、その判型、レイアウト、ルビの多さ、古典の扱いなど、抵抗のあるところかもしれない。

しかし、必ずしも中学の国語科学習において十分な到達点を得ていない生徒たちを念頭において、中学の学習からなだらかにつなぐという考え方を具体化すれば、自然にこういう形になると考えられる。中学から高校への移行のハードルの高さに十分に配慮した教科書が生まれたと受け止めていただければありがたい。

三浦和尙(みうらかずなお) 一九五二年、
広島県生。現在、愛媛大学教育学部教授・
附属小学校長。近著に『読む』ことのも再
構築『国語教室の実践知』(ともに三省堂)
など。